

ジャンマリア・オルテスの自筆書簡について

藤 井 盛 夫

うなシステムで支障がないのであろう。

I はじめに

前稿で後回しにしたコッレール図書館におけるジャンマリア・オルテスの手稿の調査を、マルチャーナ図書館の休館中に行った。本稿は前稿の続編であるが、オルテスの手紙（自筆書簡）から浮かび上がった事柄を明らかにしようとするものである。

コッレール図書館はサン・マルコ広場を囲む回廊の大聖堂に向かって右側の半ば、カフェ・フロリアンを過ぎた右側の半開きの扉を入り、各国語と共に「都市警察」の張り紙のある看板を通り過ぎ、銀色のエレベーターで3階（日本式には4階）まで上がったところにある。受付のある小さな目録室の右手に二つの扉があり、二部屋続きの部屋、手前に三列、奥に二列の平机を並べた席数34のこぢんまりとした閲覧室がある。チコーニャの収集したオルテスの膨大な手稿を中心とした、図書というよりも手稿を集めた図書館である。受付で登録を済ませ、資料請求をして適当な席に座っていると、席まで資料を持ってきてくれる便利なシステムで、複写を受付に依頼しても同様に席まで持ってきてくれる。資料請求は1回1冊、20分おきに1回請求できるが、返却は返却台に置くだけなので、複数の資料を同時に閲覧することが可能である。顔写真付きの入館証を作成し、1回1冊、返却後にしか再請求できないマルチャーナ図書館のシステムとはずいぶん違う。コッレール図書館が市立であり、利用者も1日30人程度（入館証代わりの通し番号の入った入館記録と、退館時に提出するその半券から見て）なので、そのよ

II オルテスの自筆書簡

まずフランコ・ロンゴーニが言及しているCicogna 2658 (CAT. CIC. 1595)¹⁾は縦320mm、横220mm、厚さ70mmの厚紙に模様のある紙を張った装丁で、背表紙が縦に二つに裂けているものを紐で十文字に縛ってある。綴じがかなりきつく、紙の綴じてある側を読もうとすると、どうしても無理やりページを開かなければならぬため、裂けてしまったのであろう。これはまず43行の罫線の入った純白の紙に書かれたチコーニャ自身の標題紙に“EPISTOLARIO | DELL'ABATE GIAMMARIA ORTES | VENEZIANO | SCRITTO TVTTO SVO CARATTERE”（すべて自分の筆跡で書かれたヴェネツィア人ジャンマリア・オルテス師の書簡集）とあり、“MDCCCXXX”（1830年）の年号が書かれている²⁾。

¹⁾ このCicogna 2658というのはコッレール図書館の整理番号であり、CAT. CIC. 1595はチコーニャの目録番号である。チコーニャ手製の目録カードには1595と2658の両方が書かれているので、自筆書簡が二組あるのかと思った。そこでCicogna 1595を請求してみると、革の立派な装丁で、中身は38枚のラテン語の（恐らく）説教集と楽譜付き讃美歌集であった。35枚目の表（69ページ目）にオルテスのものらしき斜体で“Madrigale”の標題の下に何か書かれているが、1736年の表記があるので、これはオルテス23歳のときの修道院時代に使用したものであろうと思われる。下の註4）も参照のこと。

²⁾ やはりここでもマルチャーナ図書館と同様、手稿にはA4サイズの閲覧票（Elenco dei lettori che anno studiato il seguente manoscritto）が付いているが、1枚目にもかかわらず日付は2000年以降になってい

「書簡集」とは言うものの、正確にはオルテスが送った自分の手紙の写しを 307mm×195mm の紙に、送った手紙ごとに一行空けて記録したものである。幅 37mm の左余白に宛名と宛先の地名、34mm の右余白にオルテスが手紙を書いた地名（ほとんどがヴェネツィア）と日付が書かれており、1 ページは 36 行、ページ数はノンブルがないが、手紙ごとにチコーニャが鉛筆で番号を書き入れており、この大きさの紙に書かれているのは 708 通、1758 年 8 月 26 日から 1786 年 12 月 31 日までの手紙（の写し）であり、大きさの異なるその他の写しが 12 通、720 番目には日付がないが、719 番目には 1789 年 8 月 29 日の日付がある。これらを挟んだ形で、上記の標題紙の後に、オルテスの生涯についての記述、著作目録、最後に送り先ごとの手紙の索引がチコーニャによって作成されている。

オルテスの書簡を全部紹介するのは大変であるし、チコーニャの作業の後追いになるので、ここでは、ロンゴーニが『俗論の誤り』の手沢本の本文最終ページのオルテスの書き入れ「ヴェネツィアにて、1771 年 4 月 16 日」について、「周知のように、この日付は著作の完成の日付であって、訂正の日付ではない」(XX) とし、ジャンフランコ・トルチェッランの著作を参照していることの確認のため、この日付の前後から、『俗論の誤り』(第二部)の本文最終ページの日付 1772 年 5 月 4 日、『国民経済学』の本文最終ページの日付 1773 年 3 月 20 日前後にオルテスが誰にどのような手紙を書いているのかを見ることにし、この期間の宛名のリストを作成した(付録)。

これらの書簡から浮かび上がるのは、自著の出版のために費用の工面をし、出版許可を得るため「異端審問」を切り抜けようと教会に手稿(完成原稿)を送ろうとするオルテスの姿である。友人

で当代随一の作曲家ヨハン・アドルフ・ハッセに 1860 リラの資金を貰い(260 番)、あまりの無心に耐えかねたのか、ハッセが紹介したウィーンのシュミットメル兄弟に資金を融通してもらい、ポローニャの出版者ジャンバッティスタ・サッシと交渉し、ポローニャの教会のペトロニオ・マッテウッチ師やファエンツァの兄のドン・マウロ師に手稿や自著を寄贈している。

さて、『俗論の誤り』の刊行日については、確かに 1771 年 4 月 13 日にハッセにポローニャに(自著を引き取りに行くために)行く旨をヴェネツィアで書いているが、兄マウロには 5 月 4 日にやはりヴェネツィアから手紙を書き寄せており、ポローニャからのマウロ宛ての手紙は 5 月 22 日なので、ポローニャのサッシから自著を受け取り、すぐヴェネツィアに引き返し、訂正して「ヴェネツィアにて、1771 年 4 月 16 日」と記したのかもしれない。そうだとするとこの日付は「周知のように、……訂正の日付ではない」と言い切れるのかどうか疑問であり、トルチェッランの本を参照してもそのようなことは書いていない。

そして『国民経済学』の刊行日についても、ロンゴーニはトルチェッランを参照しつつ「1773 年 3 月 20 日に完成した [portata a termine] 『国民経済学』」(XVI) と言い切っているが、トルチェッランの本にはそのようなことは書いていない。しかし標題紙には刊行年の年号 “MDCCLXXIV” (1774 年) が記されている。この二つの日付、①オルテス自筆の「1773 年 3 月 20 日」と②標題紙の「1774 年」を同時に満たす『国民経済学』の印刷日および(または)出版年は、やはり①の日付(かまたはそれ以前)であり、②は出版許可が得られることを見越した言わば見切り発車の形で、事前に印刷・製本したものであろう。

しかしながらオルテスの自筆書簡によれば、241 番目の手紙、ヴェネツィアからファエンツァの兄マウロ師に宛てた 1773 年 5 月 22 日付の手紙に「私の国民経済学に関する著作の手稿 [Il Ms. dell'opera sull'economia nazionale] はすでに異端

る。筆者は 17 番目だった。毎年ほぼ 1 名は個々の書簡集を閲覧していることになる。ロンゴーニやモラートの名前はなかった。

審問を通った」と書かれている。256番目のやはり兄宛てのボローニャからの1773年12月14日付の手紙には「あなたから受け取った例のことに関する [intorno all'affare] 照合は1月までに終わりそうにありません。当地で私の本の状況は20枚 [20. fogli] まで送られてくることになっています。……印刷の続きは15日ごとに6枚 [6. fogli] 受け取る状況になっています」とあり、267番目の1774年4月9日付のマッテウッチ師宛ての手紙には「訂正のページ [la pagina delle Correzioni] を送ります。これは著作の最後に置かれるものです」としている。これは『国民経済学』の最終ページの正誤表のことであろう。そして270番目のファエンツァのマウロ師宛ての1774年4月23日付の手紙に「私の本の印刷がとうとう完了した [Il mio libro e finito al fin di stamparsi]。今日ボローニャの出版者サッシにファエンツァに40部送るように手紙を書いた」とある。

それでは、上の①と②、それにいま見た③自筆書簡の記述を同時に満たす印刷日および(または)出版年は、やはり①の日付なのだろうか。241番目の手紙については事前印刷・製本でも当てはまる。256番目の手紙については、『国民経済学』（『俗論の誤り』も同様に）が八つ折判であることを考えれば、一枚の紙（全紙）に表裏16ページ分が印刷され、『国民経済学』は標題紙を含めて「序論」が20ページ、本文411ページ、正誤表1ページの合計432ページなので、全紙27枚分である（『俗論の誤り』は標題紙とその裏の白紙の2ページ、「序文」8ページ、本文118ページの合計128ページ、全紙8枚分である）。オルテスがボローニャまで出張校正に行ったときの手紙としても、①より後の段階でまだ印刷をしているのであれば、①が記された手沢本は何なのであろうか。さらに、267番目の手紙については、「訂正のページ」はそれがもし印刷されたものならば、『国民経済学』の全ページが確定しなければ作成できないであろう。270番目の手紙については、stamparsiを印刷

（される）の意味ではなく出版（される）の意味に取れば、①の日付で事前印刷・製本された『国民経済学』が出版されたと解釈することができよう。

したがって、『国民経済学』は、256番目の手紙の内容に疑問が残るものの、1773年3月20日（またはそれ以前）に印刷・製本され、1774年4月23日に出版されたとと言えるのではなからうか。しかし、トルチェッランもロンゴーニも、なぜ誰の目にも明白なこの問題を論じなかったのであろうか。

Ⅲ オルテス宛ての自筆書簡

オルテスが書いた手紙があるならば、当然オルテスが受け取った手紙もあるはずである。それが“Epistolario di Giammaria Ortes. Lettere a lui dirette”（ジャンマリア・オルテスの自筆書簡、彼宛ての書簡）である。ロンゴーニは「Cicogna 3195-3200」（XXIII）としてトルチェッラン参照と記し、トルチェッランは「Mss. Cicogna, nn. 3195-3200bis」（36）と記しているが、これは不親切な書き方である。実際は、差出人のアルファベット順で、A1～A10、B1～B20までがCicogna 3195-3196、C1～C22、D1～D5、E1、F1～F6、G1～G13までがCicogna 3197-3198、H1～H5、L1～L4、M1～M14までがCicogna 3197-3198bis、N1～N4、O1～O7、P1～P7、R1～R8までがCicogna 3199-3200、S1～S13、T1～T7、V1～V4、Z1～Z3までがCicogna 3199-3200bisである³⁾。

3) Cicogna 3195-3196のホルダーの背表紙には“Cat. Cic. N.1534・1596 | Colloc. N.3195～3196”（チコーニャ目録1534・1596番、整理番号3195～3196）、Cicogna 3197-3198には“Cat. Cic. N.1597・1598 | Colloc. N.3197～3198”、Cicogna 3197-3198bisには“Cat. Cic. N.1597・1598 | Colloc. N.3197～3198”、Cicogna 3199-3200には“Cat. Cic. N.1599・1600 | Colloc. N.3199～3200”、Cicogna 3199-3200bisには“Cat. Cic. N.1599・1600 | Colloc. N.3199～3200”と記されたラベルが貼ってある。

これら5点の自筆書簡集は、357×260×110mmの横と下に紐のついたホルダーに挟まれており、書簡は差出人ごとに300×450mmの灰色の紙を二つ折りにしたチコーニャ手製のホルダーに挟まれ、その紙に差出人名と日付、発信地がチコーニャの筆跡で記されている。チコーニャはオルテス自身の手紙のときのような宛先の索引は作っていないが、コッレール図書館の目録カードにはオルテス発のものと同様に宛てのそれぞれの宛先と差出人、そして日付がやはりチコーニャの自筆で記されている。このカードを元にして宛先の索引が作られたと思われる。チコーニャの代わりに差出人のリスト(人名と書簡数)を作ったのがトルチェッラン(36-38)である⁴⁾。

これらの中から、Cicogna 3199-3200bisのS4のホルダーに収録されているボローニャの出版者サッシが出した手紙(1774年2月1日、3月29日、4月12日、4月19日、4月26日、5月31日、6月14日、1775年9月24日、10月17日付)を抜き出してみたが、あまりの癖字と、裏書きしているため、筆写も判読もなかなか難しい。請求書や送り状らしきもののように見えるが、貨幣単位が読めないで、ここでは紹介できない。

4) したがって、オルテス発の書簡とオルテス宛ての書簡を突き合わせると、往復書簡集が完成する。実際、ハッセとの往復書簡集(Livia Pancino, *Johann Adolf Hasse e Giannaria Ortes. Lettere (1760-1783)*, Brepolis, 1998)はそのようにして出版された。チコーニャは恐らくこの突き合わせをしたのだと思われる。というのはCicogna 3195-3200bisのホルダーには、差出人のリストの下に鉛筆書きで「1通欠けている」などと記している。例えば、以下で見るサッシのオルテス宛て書簡は9通、オルテスからは3通しかない。オルテスはボローニャまで何度か出向いているので、そこで口頭でのやり取りがあったためかもしれないが、オルテスからの書簡が少ないように思われる。トルチェッランはともかく、ロンゴーニはそのような突き合わせをしたのだろうか。ただし、オルテスの筆記体ですら解読は難しいのに、他の人のさまざまな筆記体には慣れるのに時間がかかるし、書簡が少なく、文字のサンプルが余り得られない場合は、解読はほとんど不可能である。

以下はオルテス研究の新参者である筆者のことを棚上げして言うのだが、仮にサッシの手紙を紹介したとしても、それはチコーニャの作業の後追いをしたにすぎない。アルキメデスを評して「ヨーロッパの科学の歴史とはアルキメデスに対する一連の脚注からなる」と言われているが、トルチェッランを引用して研究したロンゴーニの仕事もトルチェッランに対する少し詳しい脚注にすぎないように思われるし、トルチェッランの作成したオルテス宛ての書簡のリストもチコーニャの目録カードを元にして作成したチコーニャの脚注にすぎないように思われる。実際、ロンゴーニが『国民経済学』の「序論」を読んでいると、少なくとも1764年には書き始められた『国民経済学』の研究から始めたであろうし、1771年の『俗論の誤り』が「現下の論争」に関するものと副題にあるにもかかわらず、『国民経済学』の第二部ではなく『俗論の誤り』の第二部に躍起になることもなかったであろう⁵⁾。またトルチェッランは前稿の「覚書」

5) 前稿でも触れたことであるが、ロンゴーニのように『俗論の誤り』を主とし、『国民経済学』を従とするならば、『俗論の誤り』の方が『国民経済学』に先行したことになり、『国民経済学』の「序論」にあるように「私が本書で説明していく諸命題は10年以上に渡って私によって行われた諸現象の実際のふるまいと諸現象間の比較について証明された熟考に熟考を重ねたものである」(xv)すなわち1764年の前から『国民経済学』が書き始められたとするならば、『俗論の誤り』はその前に書き始められたことになり、10年以上前の論争を「現下の論争(presenti controversie)」と言えるのかどうか疑問である(しかもこの「現下の論争」がいつ、どこで、誰が、どのように行ったのか、誰も指摘していないのは不思議である)、『国民経済学』の「序論」の記述を認め、『俗論の誤り』が『国民経済学』の書き始めより後に書かれたものとするならば、『国民経済学』を主とし、『俗論の誤り』を従とするのが妥当であるのではなからうか。本文でも見たように『俗論の誤り』が126ページ、『国民経済学』が432ページであるので、およそ3倍半の分量であり、『俗論の誤り』の方が取り組みやすいように見える。『国民経済学』は半ばほどまでモデルの推計の連続で、数字の羅列ばかりであるが、説明の仕方は回りくどいほど丁寧である。途中で投げ出さなければ、第三編を過ぎたところからいろいろな概念が出てくるので、俄然面白く

に触れてはいるが（しかしそれはチコーニャの作成したオルテスの著作目録に載っている）、そのコメントには「残念ながらこの場合には文字の書き方 [calligrafia] が彼の特徴とはかなり違い矛盾している。しかしながら書き方の特徴は70年代のオルテスの十分な円熟期のものに相当するとわれわれには認められる。実際、綴りは非常に小さく、多くの書き直しと加筆があり、文字はすべてその年代の日付のある文書に特徴的なものである。単にこの著作の外見的な特徴に基づけば、おおよその年代測定に進むのは軽率であろう。すでにチコーニャが認めているように、内容から見てこのテキストは全く不十分で不完全なものである」(31) とある。これでチコーニャもトルチェッランも『国民経済学』が読めなかったことがわかるであろうし、上のオルテス自身の自筆書簡集を見ていれば、少なくとも1758年から1789年までのオルテスの筆跡の変化がわかったはずである。若いときの、どちらかと言えば奔放な勢いのある筆記体が、晩年にはさらに字が小さくなり、一文字一文字をゆっくり書いているように、まるで豆粒が並んでいるように見える。さらに少なくともトルチェッランとロンゴーニは、オルテスが初め幾何学を修めるために修道院に行ったこと、「覚書」の収録されている『各種著作』の中には幾何学の問題を出したり、それに答えたりして、まるで冲方 丁著『天地明察』のようなことをしていたことも全く考慮していない。『俗論の誤り』がユークリッドの『原論』のように、まず「公理」（定理）を掲げ、それを証明（説明）していくスタイルを取っていることからすれば、「覚書」の

なってくる。しかも『俗論の誤り』で展開される諸概念、例えば財・雇用・所得の三面等価（貨幣と利子を第六編で論じている『国民経済学』では財・雇用・貨幣の三面等価）などは、定義もなく、あたかも周知のことであるかのように（周知であるのはオルテスだけである）が唐突に出てくる。『俗論の誤り』は全般に用語の定義がなされていない。理系の人オルテスがそうしたことをするのは信じられないし、ロンゴーニもその点に注目すべきであった。

第1章に国民経済学などの概念の定義を掲げていること、『国民経済学』においては『俗論の誤り』のように「公理」を掲げることをしていないが、イタリア語の著作には珍しく「目次」が本文の前（通常は本文の後）にあり、そこに各章の標題にしてはやや長めの主題を書いていることなど、オルテスが理系の人であったことをすっかり忘れていのように見える⁶⁾。結局、オルテスが多才な人だっただけに、その調査・研究も網羅的になり、網羅的であるがゆえに、各分野の調査・研究の深さが浅くならざるをえなかったように思われる。トルチェッランがチコーニャの掌の上を脱し、ロンゴーニがトルチェッランの掌の上から脱するには、オルテスの著作の現物を実際に手に取り、内容を読み解くところから始めなければならず、子引き、孫引きに終始しているようでは、いつまでもチコーニャの掌の上から脱することはできないであろう。トルチェッランもロンゴーニもいずれも故人であるが、そうなると『国民経済学』を研究したモラートに期待を寄せざるをえない。今後の先行研究の検討にはそうした観点からも見ていかなければならないであろう⁷⁾。

6) 実際、イタリア語の本は、ほぼすべて目次が本文の後にある。『国民経済学』のように序文の後に目次、そして本文となっているのは珍しい。『俗論の誤り』は序文の後に「俗論の誤り」とそれを正す「公理」が正誤表のように二段組みで並べて書いてあり、その後に本文が続く、同じ著者が続けて書いた二冊の本であるから、序文・定義・説明という同じスタイルを取ったとみなすのは早計であろうか。

7) トルチェッランもロンゴーニも、そしてモラートも、さらにシュンペーターも『イタリア経済学抄史』を書いたブスケーも、いずれもケインズ革命の体験者であるかまたはマクロ経済学を知っているか修めた人々のはずである。ケインズ革命はおろか限界革命すら体験していない、まして経済学の専門家ではないチコーニャが『国民経済学』を読めなかったのは仕方ないことである。最近の研究ではケインズに言及したものもあるが、オルテスの先行研究についての筆者の検討はまだ先のことである。

IV むすびにかえて

前稿と本稿が今回の平成27年度経済学部在外研究員(短期)の成果報告の一部である。まだまだ書きたいこと、書くべきことはあるが、それらは今後の、特に『国民経済学』の検討を初めとする一連の研究の中で触れていきたい。また、この派遣期間中には決して完了しないであろう「覚書」の筆写は、また機会を見つけて続行していきたいし、『各種著作』の中の資料、判読できなかったサッシの書簡など、やり残したことはたくさんある。次の機会には万全の準備を整えて、これらの筆写・解説に臨みたい。

Venezia, 22. 8. 2015.

(本稿は平成27年度日本大学経済学部在外研究員(短期)の成果の一部である。)

参考文献

- 藤井盛夫, 「ジャンマリア・オルテスについて——その予備的研究——」, 『経済集志』第83巻第3号, 2013年10月, pp.27-34.
- , 「ジャンマリア・オルテス『俗論の誤り』について——18世紀のマクロ経済学——」, 『経済集志』第84巻第2号, 2014年7月, pp.19-24.
- , 「ジャンマリア・オルテスの手沢本について」, 『経済集志』第85巻第3号, 2015年10月, pp.109-122.
- Longoni, Franco, "Introduzione", in *Giammaria Ortes Errori popolari intorno all'economia nazionale e al governo delle nazioni*, Riccardo Ricciardi editore, 1999, pp.VII-XXXII.
- Torcellan, Gianfranco, "Scritti su Ortes", in *Settecento veneto e altri scritti storici*, Giappichelli, 1969, pp.1-104.

付録：ジャンマリア・オルテスの自筆書簡の宛先リスト (部分)

189	Al Sig. G. A. Hasse, Vienna	Venezia	19 Luglio 1770
190	〃		13 Settembre
191	〃		10 Novembre
192	〃		17
193	〃		22 Dicembre
194	〃		5 Gennaio 1771
195	〃		26
196	〃		2 Marzo
197	〃		13 Aprile
198	Al P. Ab. mio Fratello, Faenza		4 Maggio
199	〃	Bologna	22
200	〃		5 giugno
201	Al Urbano Bottazzi, Venezia		18
202	Al Sig. Hasse, Vienna		25
203	Al Carlo Bettuss, S. Vito		2 Luglio
204	Al Urbano Bottazzi mio Compare, Venezia		9
205	Al Sig. Hasse, Vienna	Venezia	3 Agosto
206	Al Sig. Ab. Matteucci, Bologna		30
207	Al P. Ab. mio Fratello, Faenza		31
208	Al Sig. Ab. Matteucci, Bologna		19 Settembre
209	Al Sig March. Caralcabo, Malta		14
210	Al Sig. G. A. Hasse, Milano		12 Ottobre
211	Alla Sig.ra Marianna Davis, Milano		19
212	Al P. AB. mio Fratello, Faenza		9 Novembre
213	Al Sig. G. A. Hasse, Vienna		18 Dicembre
214	Al P. Ab. mio Fratello, Faenza		9 Gennaio 1772
215	Al Sig. G. A. Hasse, Vienna		18
216	Al Sig. N. N.	Di casa	1 Marzo
217	Al Sig. G. A. Hasse, Vienna	Venezia	14
218	〃		18 Aprile
219	Al Sig. Ab. Matteucci, Bologna		25
220	Al Sig. G. A. Hasse, Vienna		16 Maggio
221	Al Sig. Ab. Matteucci, Bologna		23
222	Al Sig. P. Ab. mio Fratello, Roma		〃
223	Al Sig. G. A. Hasse, Vienna		6 Giugno
224	〃		4 Luglio
225	Al Sig. Ab. Fadalti, Sacile		29
226	Al P. Ab. mio Fratello, Faenza		1 Agosto
227	Al Sig. G. A. Hasse, Vienna		15
228	Al P. Ab. mio Fratello, Faenza		5 Settembre
229	Al Sig. G. A. Hasse, Vienna		25
230	Al P. Ab. mio Fratello, Faenza		17 Ottobre

231	Al Sig. G. A. Hasse, Vienna		7 Novembre
232	〃		5 Dicembre
233	Alla Sig.ra Marianna Davis, Firenze		26
234	Al P. Ab. mio Fratello, Faenza		〃
235	Al Sig. G. A. Hasse, Vienna		2 Gennaio 1773
236	Al P. Gen. Bonbargo P. P. di filosofia in Padova		28
237	Al sig. G. A. Hasse, Vienna		30
238	Al sig. N. N.	Di casa	31
239	Al Sig. G. A. Hasse, Vienna	Venezia	20 Febbraio
240	〃		13 Marzo
241	Al P. Ab. mio Fratello, Faenza		22 Maggio
242	Ai Sig.ri Fratello Smitmer, Vienna		10 Giugno
243	A P. Ab. mio Fratello, Faenza		21 Agosto
244	Al Sig. Ab. Matteucci, Bologna		28
245	Ai Smitmer, Vienna		1 Settembre
246	Al P. Ab. mio Fratello, Faenza		4
247	Al Sig. Ab. Matteucci, Bologna		11
248	Al Sig.ra Rosa Pesetti, Firenze		〃
249	Al Sig. Dott. Cevati, Bologna		2 Ottobre
250	Al P. Ab. mio Fratello, Faenza		16
251	Al Sig. Ab. Matteucci, Bologna		〃
252	Allo stesso, Bologna		25
253	〃		30
254	Al Sig. G. A. Hasse, Vienna	Bologna	9 Novembre
255	Al P. Ab. mio Fratello, Faenza		10
256	〃		14 Dicembre
257	Al Urbano Borrazzi mio Compare, Venezia		〃
258	Alla Sig.ra Marianna Davis, Londra	Venezia	31
259	Al Sig. Ab. Matteucci, Bologna		8 Gennaio 1774
260	Ai Sig.ri Smitmer, Vienna		〃
261	Al Sig. Ab. Matteucci, Bologna		29
262	Ai Sig.ri Smitmer, Vienna		5 Febbraio
263	Al Sig. Ab. Matteucci, Bologna		12
264	〃		26
265	Ai Sig.ri Smitmer, Vienna		25 Marzo
266	Al Sig. Giamb. Sassi, Bologna		9 Aprile
267	Al Sig. Ab. Matteucci, Bologna		〃
268	〃		23
269	Al Sig. Giamb. Sassi, Bologna		〃
270	Al P. Ab. mio Fratello, Faenza		〃
271	Al Sig. Ab. Matteucci, Bologna		30
272	〃		14 Maggio
273	Al Sig. Sassi, Bologna		〃
274	Al Sig. Dotto. Bianchini Medico, Udine		28
275	Al Sig. Simon Carrelli, Residenti di Venezia a Napoli		〃

276 Al Sig. Don Canterzani, Bologna	4 Giugno
277 Al Sig. Ab. mio Fratello, Faenza	11
278 Al Sig. Ab. Matteucci, Bologna	18
279 Al P. Ab. mio Fratello, Faenza	2 Luglio
280 Al Sig. Ab. Matteucci, Bologna	9
281 Ai Sig.ri Smitmer, Vienna	16
282 Al Sig. Ab. Matteucci, Bologna	23
283 Al P. Ab. mio Fratello, Faenza	〃
284 Al Sig. Bianconi, Ministro di Sassonia, Roma	〃
285 Al P. Ab. mio Fratello, Faenza	17 Settembre
286 Al Sig.ra Leonilda Burgione, Berlino	16
287 Al Sig. Giuseppe Landini, Firenze	17 Dicembre
288 Alla sig.ra Burgione, Berlino	22
289 Ai Sig.ri Smitmer, Vienna	1 Febbraio 1775
290 Al Sig. Landini, Firenze	4
291 Al P. Ab. mio Fratello, Faenza	11
292 Alla Sig.ra Burgione, Berlino	24 Marzo
293 Al P. Ab. mio Fratello, Faenza	13 Maggio